広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 XXI 2009. 3. 22

サミュエル・バーバーの歌曲集＜Hermit Songs＞に関する研究

山 下 裕 子
（本講座大学院博士課程前期在学）

Ⅰ. 序

サミュエル・オズボーン・バーバー（Samuel Osborne Barber（1910-1981））は、20世紀のアメリカのクラシック音楽界を代表する作曲家である。彼はアメリカで最も権威あるピューリッツァー賞を2度受賞し、作曲作品では特に＜弦楽器のためのアダージョ Adagio for Strings＞が有名であり、今でもコンサートの演目に組まれ広く親しまれている。バーバーはピアノ・声楽・作曲を専門に学び副科では指揮を専攻していたが、プロの声楽家を目指していたことや、オペラ歌手の叔母の影響で、特に声楽には非常に大きな関心があった。バーバーが生涯で作曲した約200の作品の内、歌曲作品はその過半数を占めており、ここからも彼にとって歌曲作曲が重要な位置を占めていたことがうかがえる。バーバーは歌曲作品において詩の選出をいつも慎重に行い、旋律を考える際にはそれらの詩の言葉の感覚を非常に大切にした。

バーバーの歌曲作品の中に、全10曲の歌曲から成る＜世捨て人の歌 Hermit Songs＞があるが、この歌曲はバーバーの作品の中で、現在最も演奏される作品の一つである。この歌曲集の特徴は、10曲全てに拍子記号が存在せず、頻繁な拍子変化が見られるということである。これはバーバーが歌詞のアーティキュレーションを重視し、言葉のリズムを旋律に反映させたためであると考えられる。バーバーは、「もし私が言葉のために音楽を書いているとしたら、私は自分自身をその言葉の中に浸し、音楽を湧き出させているのです。」[1] と歌曲作曲の際の自身のスタンスについて述べている。この歌曲の歌の旋律について Davis（1983）は、「バーバーは、言葉を優先的に考えて旋律を書いたのであり、その逆ではない。」[2] とし、Edward（1985）は「作曲者は、発音や各音節や言葉の長さの洞察がとても鋭く、その適切なリズムについては全く疑問の余地がない。」[3] と言及している。この歌曲に対して他の批評家たちも同じような批評を残しているが、なぜその様に感じられるかその理由については誰も述べていない。そこで筆者はなぜこの歌曲が言葉として自然に聞こえる音楽であるのか、その理由について研究することとした。

また、バーバーが残した歌曲集の中では10曲が最も多い曲数であり、バーバーにとって＜Hermit Songs＞は何かしら意味あるものであったと考えられる。この歌曲集のための曲は当初25種類作曲されていたが、その内10曲のみが残り、最終的には作曲順どおりではなく並び換えられた。本研究ではバーバーがこの10曲を並び換えた必然性を探り、これらの分析結果から彼の目指した演奏表現方法を考察し、彼の作品理解に役立てることを目的とする。

Ⅱ. 歌曲の楽曲分析

ここでの楽曲的分析は、それぞれの曲が歌曲集＜Hermit Songs＞の雰囲気を創るためにどう寄与しているかを明らかにするために行うこととする。また検証方法は、楽曲の音の構造を詳しく検証することと拍節構造を分析することで行った。ここでは10曲全ての分析を通して、それぞれの歌曲にみられた類似性やその特徴等を、a.リズム、b.形式、c.和声、d.調性について分析した。

a. リズム

- 旋律において歌詞の音節一つに8分音符一つが置かれ、また10曲を通して多用されていた。
- 柔軟な歌の旋律における8分音符で構成されたフレーズは、小節線を無視したかのように頻繁に現れ、それはピアノ伴奏においても同様であった。歌・右手の伴奏・左手の伴奏がそれぞれ異なるフレーズ

の区切り方で現れ、ポリフォニックな響きが多用されていた。

- それぞれの曲中では、様々なリズムパターン、シンコペーション、ヘミオラなど、各フレーズにおいて柔軟性な組み合わせが自由にされていた。その使用頻度や反復性など、一定の規則は見られなかった。
- 拍子においては、変拍子に伴って2拍子と3拍子を組み合わせた拍が、10曲の内ほとんどの歌曲で見られた。
- 楽曲分析の点から概観すると、頻繁に変化する拍子やその小節線の引き方について特に規則性はないと判断した。むしろその規則性は、より歌詞が持つリズムの強弱と関係がある様に見受けられた。

b.形式

- 曲の構造を分析した結果、通作歌曲、ABの2部形式、またはABAの3部形式、アリア、レチタティーヴォの形式等がそれぞれ取られていたが、各曲に使用された形式は概観して2部形式または3部形式が使用される傾向があった。
- 詩の形式が優先的に配慮され、音楽形式2次的に決定されていた。

表 1　<Hermit Songs>10曲の形式

歌曲名	形式
Ⅰ.聖パトリックの苦行	ABA形式（通作歌曲）
Ⅱ.教会の夜の鐘楼	通作歌曲（AA'BC形式）
Ⅲ.聖アイタの幻想	レチタティーヴォ+ アリア{ ABAC形式 }
Ⅳ.神々しい餐宴	ABA形式（AA'BC形式）
Ⅴ.磔	ABA'A形式（AB形式、ABA'A形式）
Ⅵ.海難	ABA形式
Ⅶ.乱れた関係	AA'形式（AA'BB'形式）
Ⅷ.僧侶と猫	ABA形式
Ⅸ.神への賞賛	AA'B形式（通作歌曲）
Ⅹ.世捨てへの憧れ	ABA'形式

注）形式の項目の括弧でくくってあるものは、他の著者が異なる形式であると言及していた場合にのみ記した。

c.和声

- 歌の旋律と伴奏には、完全4度と完全5度の音程の関係が特に多く見られた。
- 隣り合う音程を検証した際も、音を飛ばして検証した際にも、完全4度と完全5度は最も多く見られた音程であった。また、伴奏の音程関係と歌の旋律の縦の音程関係にもよく見られた。

d.調性

- この歌曲集では臨時記号が頻繁に使用されていたため、どの歌曲も調性が特定しにくいという傾向が見られ、全体的には無調の様な響きの曲が多い。
- 頻繁に転調しているように感じられる曲もあったが、特に転調する際の規則性などは見られなかった。

表 2　<Hermit Songs>10曲の調性

歌曲名	調性
Ⅰ.聖パトリックの苦行	g#→g#→D→g#
Ⅱ.教会の夜の鐘楼	無調

Ⅲ.聖アイタの幻想	無調(G→B→E♭)→f→As→g→c→f→無調
Ⅳ.神々しい餐宴	F→A♭→(A♭→F)→F
Ⅴ.磔	a
Ⅵ.海難	c
Ⅶ.乱れた関係	無調(a)
Ⅷ.僧侶と猫	F→無調(E)→G#→F
Ⅸ.神への賞賛	C
Ⅹ.世捨てへの憧れ	g→a→無調(g#)→g

注）調性の項目の括弧でくくってあるものは、他の著者が異なる調性であると言及していた場合にのみ記した。

Ⅲ. ＜Hermit Songs＞における旋律と歌詞の整合性

バーバーは言葉の韻律、英語という言語の持つリズムやアクセント等に配慮して作曲したことが言われたのは前述したとおりである。彼の作曲した旋律が語っているように自然に聞こえるのには、歌の旋律と言葉として英語が持つリズムやピッチに何かしら関係があるのではないかと想定される。

1.単語レベルの分析と考察

アクセント言語である英語では、単語のどの音節にアクセント強勢を置いて話すかが極めて重要とされ、英語を発話しアクセント強勢が付けられる際には、一般的に次に示す様な特徴が得られるとされている。

(A)アクセントを持つ音節は、前後の音節より発音の時間が2〜3倍長くなる。[3]

(B)アクセントを持つ音節は、前後の音節よりもピッチが高くなる。[4]

(C)アクセントを持つ音節は、前後の音節よりも音量が強く読まれる傾向にある。[5]

バーバーが言語の特徴を踏まえて作曲したなら、歌曲に上記した言葉の特徴が反映されているはずである。研究には＜Hermit Songs＞の全10曲と、頻繁に演奏される歌曲、＜サミュエル・バーバー　高音用歌曲集　Barber, Samuel. *Collected Songs for high voice*＞（1971）から選出した。ここでは歌の旋律において、単語レベルとフレーズレベルで注目し、旋律と言葉の特徴がどの程度反映されているかを、a.音価、b.音高、c.強拍の3つの要素において言葉の特徴がどのように反映しているかを検証した。単語レベルの検証では、2音節以上持つ単語を歌詞から抜き出して、その単語のアクセントのある音節において言葉の特徴が反映されているかを調べた。

a.音価

3つの特徴のうちの（A）の英語朗読時の現象が旋律に反映しているかを検証した。アクセントを持つ音節において、「単語内の他の音節より長い音価の音符が置かれている」という条件を満たせば英語の言語の特徴が旋律に反映されていると見なすこととした。それを検証するために、「旋律に言葉の特徴がよく反映されている」を○、「適度に言葉の特徴が反映されている」を△、「言葉の特徴が反映されているとは言えない」を×とし、それぞれの条件と種類を次に示した。それぞれの単語において、次の条件が当てはまるかどうかを検証した。

○「単語内のアクセントを持つ音節に、最も長い音価の音符が置かれていた場合」
△「単語内のアクセントを持つ音節と隣り合う音節が、同じ長さの音を持っていた場合」
×「単語内のアクセントを持つ音節より隣り合う音節に長い音価の音符が置かれていた場合」

分類は以上の様に行った。それぞれに当てはまる単語の数を計算し、全体の単語数に占める○、△、×それぞれのパーセンテージを算出し、以下にその全体図を示した。

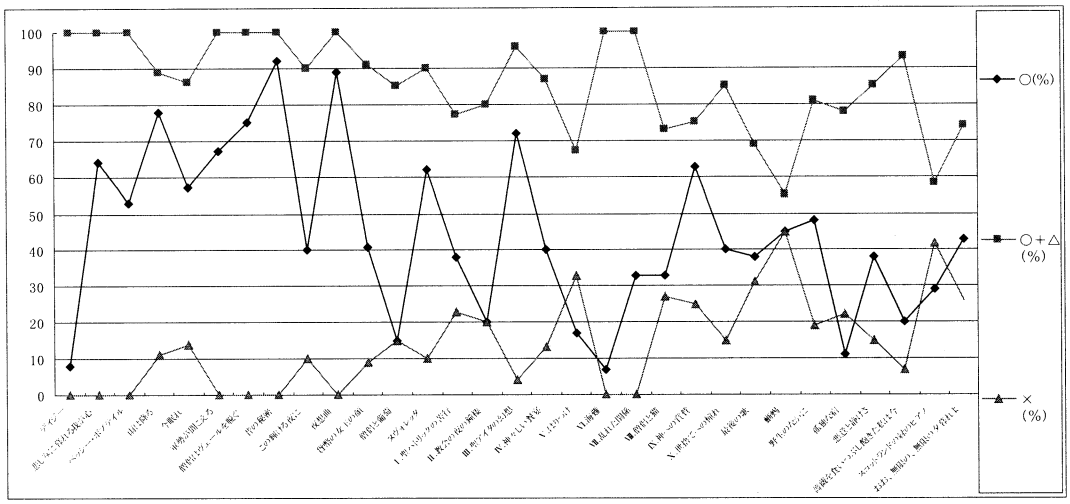


図 1　アクセントを持つ音節と音価の関連分析

b. 音高

上記した（B）の英語朗読時の現象が旋律に反映しているかを検証する。アクセントを持つ音節において、「隣り合う音節に付された音より、高い音がつけられている」という条件を満たせば英語の言語の特徴が旋律に反映されていると見なすこととし、それぞれの単語において次の条件が当てはまるかどうかを検証した。

○「単語内でアクセントを持つ音節に最も高い音が置かれている場合」、 △「単語内でアクセントを持つ音節に、他の音節と同じ高さの音符が置かれている場合」 「単語内の音節が 3 つ以上で、セカンドアクセントを持つ音節に最も高い音が置かれている場合」 ×「単語内のアクセントを持たない音節に最も高い音が置かれている場合」

この 3 種類に分類してその単語の数をカウントした。音価検証の時と同様にして＜Hermit Songs＞を含む歌曲集の中にあった英語の歌詞の全ての歌曲において検証した。結果は以下図に示した。

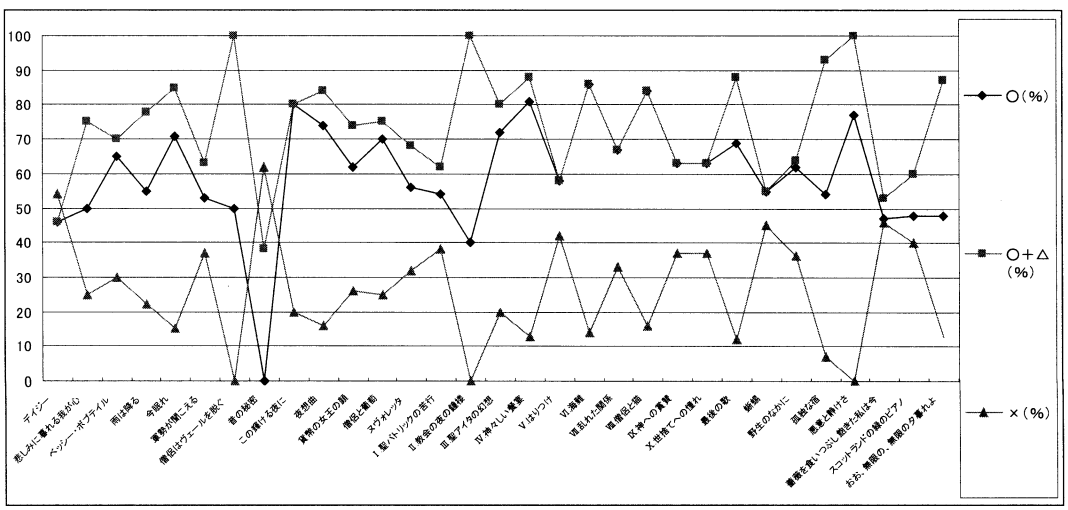


図 2　アクセントを持つ音節と音高の関連分析

c. 強拍

上記した（C）の英語朗読時の現象が旋律に反映しているかを検証する。アクセントを持つ音節において、「アクセントを持つ音節が小節の強拍の箇所に来ている」という条件を満たせば英語の歌詞が旋律に反映されていると見なすこととする。それぞれの単語において、次の条件が当てはまるかどうかを検証した。

○「単語内のアクセントを持つ音節が、強拍に来ている場合」
×「単語内のアクセントを持つ音節が、強拍に来ていない場合」

これらを条件として、次の表の①～④の4つの項目において検証を行った。

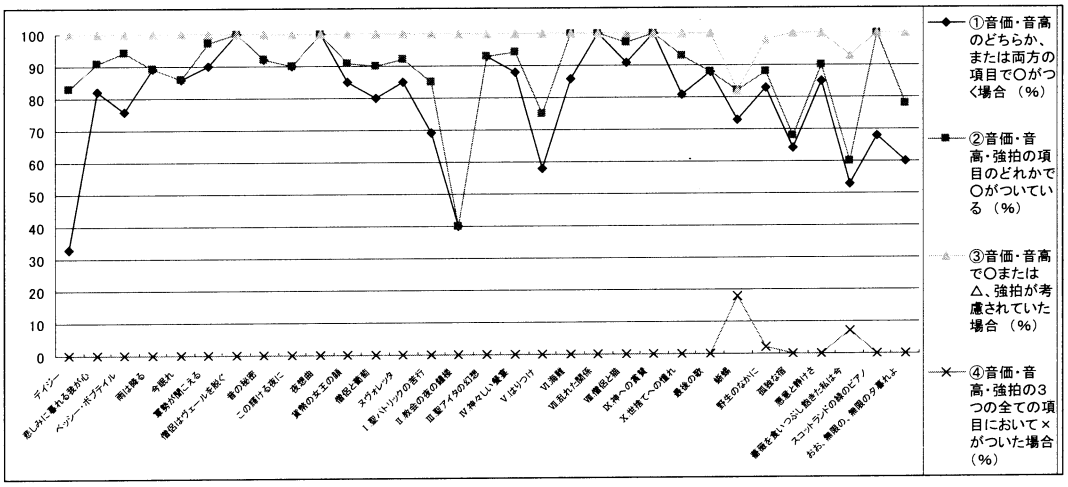


図 3　アクセントを持つ音節と音価・音高・強拍の関係性

上表の①から、音高か音価のどちらか単独で考えるときと比較して数値が上がっていることが分かる。音高について配慮されない場合は音価が、音価について配慮されていない場合について音高について考慮されていることが明らかとなり、この2つが相補的な関係であることが分かった。それ故、これは単に音高と音価の両方考慮したから数値が上がったのではないと考える。また同表の①と②を比較すると、この表に載っている31曲の内、①で既に100%になっている4曲を含めて24曲の数値が②で増加していた。音価、音高に加え、強拍を含めて考えた②の数値が高くなっていることから、音価と音高のどちらも考慮されない場合において、強拍にアクセントを持つ音節が置かれるように考慮されていることが考えられる。これも、①と同様に、検証によって音価、音高、強拍という3つの要素において相補的に言葉の特徴が歌曲の旋律に反映されているということが分かった。

また、表の③はほとんど変化がないが、①～③言語の特徴が反映されていると考えられる項目は全て減少傾向にあることが分かる。バーバーの作風として、少しずつではあるが言葉の特徴を歌曲に反映させるというリズム（音価）やピッチ（音高）、アクセント（強拍）への配慮は徐々に少なくなってきていることが読み取れた。言葉の特徴を歌曲に反映させている、という批評の見られるバーバーであったが、彼の作品は年を追うごとにその傾向は薄れていったことが分かった。それは彼が新しい作風を追及していくうちにこのような作品の特徴を持つようになったのではないかと推測される。表④では、音価、音高、強拍の全ての要素で×、つまり全く言葉の特徴が反映されてないという判断ができる項目は、後期の数曲を除けばほぼ全ての対象にした歌曲において0%という数値が得られ、バーバーが言葉の特徴を反映させていたことは明らかであったと分かる。

2.フレーズレベルの分析と考察

原詩は韻文の形をとるものも見られたが、翻訳する際の都合上ほとんどが散文の形で訳され、また脚韻・頭韻を踏んでいないものも多く見られた。バーバーが読んだこの歌曲のための詩は、それを後に近代の

20 世紀を代表する詩人や作家たちが、自分の著書で現代の英語に翻訳したもので、この歌詞は普通詩が持つ規則的な弱強のリズムを持ち合わせていない。そのため筆者が一音節ずつ弱または強のリズムに分ける必要があった。

フレーズレベルで検証を行うにあたり、一般的に弱く読まれる機能語（前置詞・冠詞等）は弱リズム、内容語（名詞・形容詞・本動詞等）は強リズム[6]、として歌詞の音節の強弱を筆者が分け、歌の旋律の音価、音高、強拍のどの項目で言葉の特徴が反映されているかを調べることとした。次の条件に当てはまる強リズムを持つ音節には、次の表の線の種類にしたがって印をつけた。

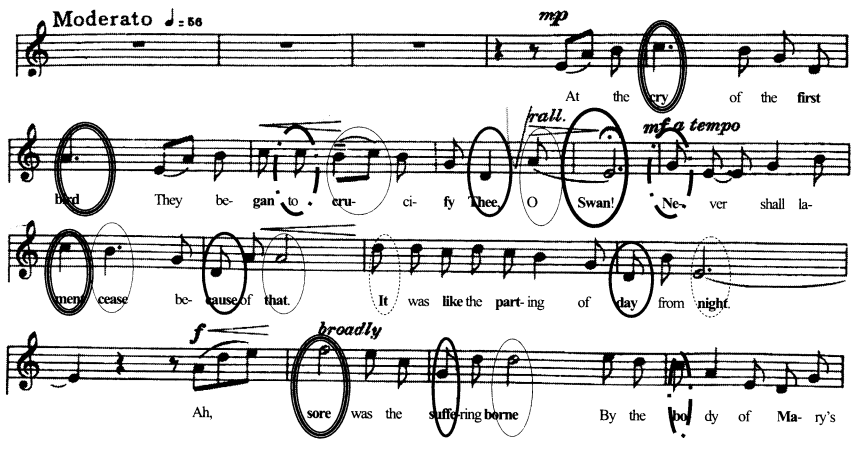
音価「前後の音節につけられた音よりも、強リズムを持つ音節の音価が長い場合」
音高「前後の音節につけられた音よりも、強リズムを持つ音節の音が高音である場合」
強拍「強リズムを持つ音節が強拍にちょうど位置している場合」

表 3　音価・音高・強拍における線の種類

種類	線
音価	
音高	
強拍	
音価＋音高	
音高＋強拍	
強拍＋音価	
音価＋音高＋強拍	

次の表はこの検証結果の一部である。

＜V. 磔＞



フレーズレベルでの検証においても、単語レベルで検証したときと同様に、強リズムの置かれる音節に、言葉の特徴が反映され、歌曲集の歌詞の中で筆者が強リズムと置いた音節のほぼ全てに、バーバーは以下の 3 つのいずれかの条件、または複数のものにあてはめて音符を付していることが分かった。

①強リズムの音節を、強拍に置いている
②強リズムの音節を、前後の音より音価の長い音符に置いている
③強リズムの音節を、前後の音より高音に置いている

特に、6/8 拍子や 4/4 拍子が見られるときは、6/8 拍子の 4 拍目、4/4 拍子の 2 拍目に強アクセントを持つ音節が置かれており、小節内でもその強アクセントの位置を意識して配置していたことが分かった。

以上、単語とフレーズレベルの検証結果から、バーバーの変拍子の多用は英語の言葉のリズムとアクセントに密接に関係していたことが分かった。

Ⅳ. 10 曲の並び方の必然性と演奏法の解釈

表 4　＜Hermit Songs＞作曲された順番と作曲年月日

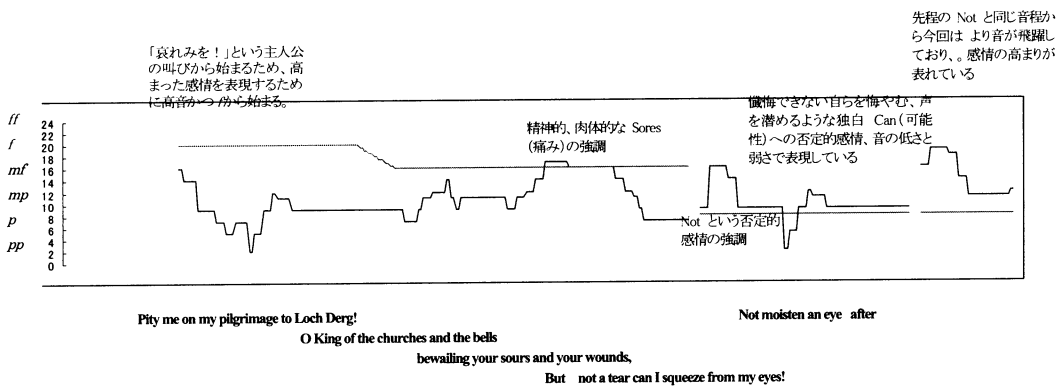
作曲年月日	歌曲名	出典
1952 年 11 月 17 日	Ⅰ.聖パトリックの苦行	＜Silver Branch＞
1952 年 11 月 3 日	Ⅱ.教会の夜の鐘楼	＜The Romanesque Lyric＞
1953 年 1 月 9 日	Ⅲ.聖アイタの幻想	＜Silver Branch＞/＜A Celtic Miscellany＞
1952 年 11 月 13 日	Ⅳ.神々しい餐宴	＜Silver Branch＞
1952 年 10 月 26 日	Ⅴ.磔	＜The Romanesque Lyric＞
1953 年 1 月 6 日	Ⅵ.海難	＜Silver Branch＞
1953 年 1 月 15 日	Ⅶ.乱れた関係	＜A Celtic Miscellany＞
1953 年 2 月 16 日	Ⅷ.僧侶と猫	＜Silver Branch＞/＜The Romanesque Lyric＞
1953 年 1 月 27 日	Ⅸ.神への賞賛	＜A Celtic Miscellany＞
1953 年 1 月 15 日	Ⅹ.世捨てへの憧れ	＜Silver Branch＞

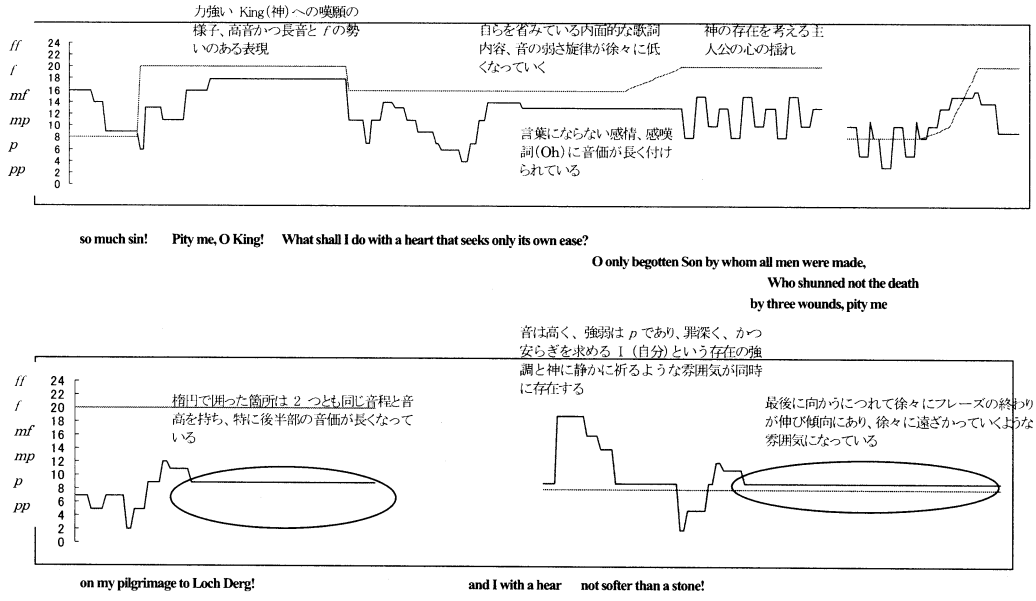
上表を見ると、ほとんどその内容は宗教的なものか、自然をテーマにあつかったものであることが分かる。歌詞は特に宗教色の濃い作品のカテゴリーを主にして、色々な詩がランダムに配置されている。また実際の作曲年月日の順番と、最終的に並べられた 10 曲の並びとは大きく異なる。筆者はバーバーがどのようにしてこれらの 10 曲を並べ替えたかを検証するため、曲を図式化して曲を分類し検証する。

1. 図式化した旋律における検証

次の表は、全 10 曲を視覚的に捉えやすくするためと、その 10 曲が並べられた必然性を検証するために、10 曲を図式化したものである。この結果を基に、10 曲の分類を行った。図式化の方法は、音符の長さを歌曲の中で出てくる最も短い音符の 32 分音符を 1、16 分音符を 2、8 分音符を 4、とそれぞれの相対的な音符の長さを算出した。強弱については、歌曲中で最も弱い *pp* を 4、最も強い *ff* を 24 としてその大きさを数字で表した。音の高さは、歌曲中の最低音(c^1)を 1、半音ずつ上がる毎に値を 1 増やし、歌曲のなかの最高音(b^2)を 23 としてその高さを数字で表したものである。尚、この図の時間軸は、バーバーとプライスの初演時の録音 CD を参考にしており、その演奏時間の 30 秒は表の横 1 行の長さと対応している。また、この＜Hermit Songs＞の旋律と強弱を図式化した表には、演奏するにあたって重要であると思われることなどの気づきも合わせて随所に書き記した。

＜Ⅰ.聖パトリックの苦行＞





(1:25)

歌の旋律を図式化し各曲に共通して見られる、歌詞内容と曲想の特徴を書き出し、<Hermit Songs>10 曲を（A）～（D）の 4 つに分類した。

（A） I・V・X

この 3 曲はどれも歌詞におけるキリスト教色が濃く、死を予感させる内容であり、神への許しを請い、また死の苦しみや孤独といったものを描いた内容となっている。特に I と X は、巡礼というテーマを扱っているという点で共通している。V が Moderato、X が Calmo e Sostenut と遅めの曲となっている。3 曲とも他曲と比較して各フレーズの終わりの音がより長く伸ばされる傾向にある。特に“O”や“Ah”などの感嘆詞が比較的よく伸ばされている。また一つ一つのフレーズの終わりの長さが不規則的で、次のフレーズの始まりが予測しにくいことから、より話しているような雰囲気がでていると考える。特にこの 3 曲では歌詞の中で鍵になる重要な単語は特に長い音符が付される傾向にある。

（B） II・VII

両曲とも歌詞の内容は人間の不誠実さについて語られており、伴奏における不協和音の多様によって、その歌詞内容が反映した薄暗く不気味な雰囲気となっている。この 2 曲は歌詞が非常に短いため、それぞれ II が 5 小節、VII が 10 小節とその曲そのものも短い。II は遅く、VII は速く、対照的である。しかしフレーズごとの旋律の音域検証で、II は 5 半音か 7 半音、VII は 4 半音の音域しか使われておらず、両曲とも旋律は極めて動きが少ないといえる。他には共通して *p* が加わり、歌は全体的に誰かが静かに話しているような感じに聞こえる。VII では 2 フレーズの内の前半が *f* であるが、旋律と伴奏に使われている音が高音、またその音の少なさから曲としての動きは少なく、囁いているように聞こえるということは共通している。

（C） III・VIII

III は「Infant Jesus~」、VII は「Pangur, white Pangur~」と同じフレーズが繰り返され歌詞の形式が似ており、小節数もそれぞれ III が 45 小節、VII が 52 小節と歌曲集の中でも長めの曲という点で共通している。III 番のレチタティーヴォを除けば、Andante con moto 付点 4 分=46、VII は Moderato flowing 付点 4 分=76 であり、この 2 曲は歌曲集の中でも比較的ゆっくりとした曲という点で共通している。曲中では、両曲とも基本的に 6/8 拍子がベースに使われている。同じベースの 6/8 であるが、III では流れるように、VIII では猫が歌詞に出てくるためか、曲中に休符が多用されて軽やかな感じの 6/8 拍子となっている。III のレチタティー

ヴォを除けば、両曲とも全体的に *p* から *mf* が多く、音程の動きもゆるやかで音域も広くなく、比較的穏やかな雰囲気で曲が進行している。

（D） Ⅳ・Ⅵ・Ⅸ

ⅣとⅥは歌詞の内容というよりはその形式が似ている。Ⅳは「I would like (to)~」、「It has ~ed」の歌詞が繰り返し使用され、それぞれの歌詞で似た音形が見られた。この3曲は、どれも比較的短く、どの曲も伴奏の基本的な音符に8分音符が多用されている。Ⅳは右手の伴奏、Ⅵは左手の伴奏に、Ⅸにおいては両手の伴奏において8分音符の多用が見られ、3曲とも8分音符のリズムの刻みが基礎になって流れていく。特にⅣの左手とⅥの左手の伴奏では左右の伴奏のリズムが交差しており、使用されている音の構造や音域は異なるが、非常に似たリズムの形をとっている。3曲とも旋律における使用音域が広く、その音の動きが多いことが共通している。例えばⅣのフレーズはたった30秒の間に7回類似したものが現れ、その音域は平均で13半音の音域を上下行している。Ⅵでも、同じフレーズの形が現れるが、徐々にその音域を広め高さを保っている。Ⅸも急な旋律の動きが見られることからここに分類したが、特に最後の「Laudaion sing」に見られる音域と、そのフレーズの形は、ⅣとⅥに見られるフレーズの動きを少し伸ばした様な形になっているものの、非常に似ていることが図から分かる。

以上の様に分類したものを下の表にまとめた。

表 9 ＜Hermit songs＞10曲の分類

Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ
(A)	(B)	(C)	(D)	(A)	(D)	(B)	(C)	(D)	(A)

表から読み取れるのは、(A) から (D) まで分類した曲が、全体に散らばり、お互いが隣り合わないような形で並んでいるということである。そのため、そのヴァリエーションの豊かさから聴き手を飽きさせることがない。この歌曲集全体を一つの曲と見なすなら、この歌曲集は全体で4つの部分から構成されていることが言えると結論付けた。

Ⅴ. 結

バーバーの歌の旋律は、歌というよりは話しかけているかの如くに聞こえると評され、筆者もこの研究を通してそれがなぜそう聞こえるのかその理由を検証してきた。結果バーバーは、強リズムを持つ音節を高い音程か長い音価を音符に付していた。また特に変拍子の強拍を利用して英語の言葉の特徴を反映させて、まるで聴き手に歌詞を語りかけているかの様な表現を実現させていた。バーバーは、歌詞の強調すべき部分とそうでない部分を、言語の持つリズムのみならず、単語の意味も加味して非常に巧みに旋律のメロディーを作曲し、その意味づけをより効果的なものにしていた。その結果聴き手は詩の印象を、より彼の解釈する＜Hermit Songs＞として感じとることが可能となるのだと考える。「古さを感じさせない、現代に通じる詩である」とこの詩をバーバーが評価したのは、彼自身「孤独から離れられない」人物であり、彼の人生観と重なる部分を多く感じたからであろうと推察する。バーバーは歌詞を堪能するのが好きな人だったという記述は様々な著書で見られたが、バーバーが詩のよさを分かっていたからこそ、歌詞の強調されるべき部分をよく知り、そしてそれを巧みに拡大して表現することで、聴くものにその詩の持つ意味を深く感じさせることを可能にしたのだと考える。

また、10曲が並び替えられた必然性についても検証した。その結果、4つの部分から歌曲集が構成されていることが明らかとなった。そのヴァリエーションに富んだ4部の構成と、それらが隣合うことなく並べられ、聴き手を飽きさせない曲の並びとなっていることも分かった。そしてこの歌曲集は「静」と「動」が巧みに使い分けられている歌曲集であり、それが聴く者の注意を魅きつけるのではないかと推察した。筆者はこの歌曲が10曲で構成されているというよりは、10曲にそれぞれ登場する10人の主人公たちが登場する一つの大きな歌曲であると考える。歌い手は、この各歌曲に登場する10人それぞれを演じ分けて歌うことが求められると考える。

バーバーの死後1982年、プライスは率直に彼の音楽について次のように述べている。「バーバーの音楽

はいつも難しいが、その作品は価値のあるものであり、とてもメロディックなものです。きっとバーバーの音楽を学ぶ人は、次の曲を学ぶのを待ちきれないと思います。その音楽は、精神的に知的なもので、耳に美しい、という珍しい組み合わせのものなのです。」彼女にそう言わしめたバーバーの魅力は、鋭い詩への解釈から生まれた、彼の豊かな表現力にあると考える。＜Hermit Songs＞はバーバーの作品を歌う歌手の間では今でも人気のある曲集であり、主にアメリカで歌われ続けている。

注及び引用参考文献

1) Heyman, B. Barbara. "*Samuel Barber the composer and his music*". Oxford University Press. 1992, p.7 より引用

2) Davis, Kathleann Alysia. "*Samuel Barber's Hermit Songs, opus 29: An analytical Study*". St. Louis. Missouri : Master of Music at Webster University. 1983

3) Hannessee, A. Don and Donald L. Hixson and Series Adviser. "Samuel Barber: A Bio-Bibliography". Green Wood Press. 1985.

4) 枡矢好弘　『英語音声学』 こびあん書房 1976 p.310

5) 寺島隆吉　『英語にとって「音声」とは何か？』あすなろ社 2000 p.83

6) 同上

7) 前掲書 4　p.15

参考楽譜

Barber, Samuel. *Collected Songs for high voice*. G. Schirmer, Inc. 1971, pp.77-102